

終戦70年

体験を語る

⑦

沖縄戦(上) 座間味島の惨劇

第2次世界大戦の末期、3月に及んだ沖縄戦では、住民と日米両軍の兵士など20万人が犠牲となった。その内、県民の犠牲者は、当時の人口の4分の1に当たる15万人という。沖縄本島上陸を前に、日本軍の背後からの攻撃を嫌った米軍は昭和20年3月23日から、慶良間諸島を攻撃した。慶良間諸島の座間味島で暮らしていた宮城恒彦さん(81)は当時11歳、母ときょうだいの6人暮らしだった。600人ほどが暮らしていた東西5キロ、南北3キロの小さな島であった惨劇を宮城さんが語った。

日本軍駐屯し

小学校を接収

子どもだったから記憶が曖昧なところもあるが、あの光景はあまりにも残酷すぎて、今でも語りたくないこともある。あの戦争は軍と軍との戦いだけではなかったから。

日本軍は昭和19年9月から、海上特攻作戦のために慶良間諸島の



宮城恒彦さん

米英の思想がすり込まれ、島の人たちは純粋だからそれを信じていた。米軍は沖縄の地形をくまなく観察、日本軍の奇襲攻撃を恐れ、背後からの攻撃を受けな

よいよ明日米軍が上陸するとうとう25日夜、「忠魂碑の前に集まれ」という伝令が回った。日

本軍のすり込みで、それを受け止めた。子どもだった私

も死を覚悟した。静かになり、物音もし

26日の昼前、「天皇陛下万歳」を合図に、教頭先生の奥さんが、持っている手榴弾を投げた。爆発音の後、静かになり、物音もし

に家族は壕へ引き返した。その壕は日本軍が掘ったもので、20人くらいが入っていたように思うが、日本兵はいなかった。幼い弟を抱いていた母の横に私は

カミソリで首を切り合った

そして次は、持参していたカミソリで互いに首を斬り合った。無傷だった私たちは、校長先生に殺してほしいと頼んだが、「自分で死になさい」と言って、母

り合って自決。その血しぶきを皆が浴びた。教頭先生の奥さんはわが子をカミソリで殺そうと次々に首を切りつけていったが、失敗し

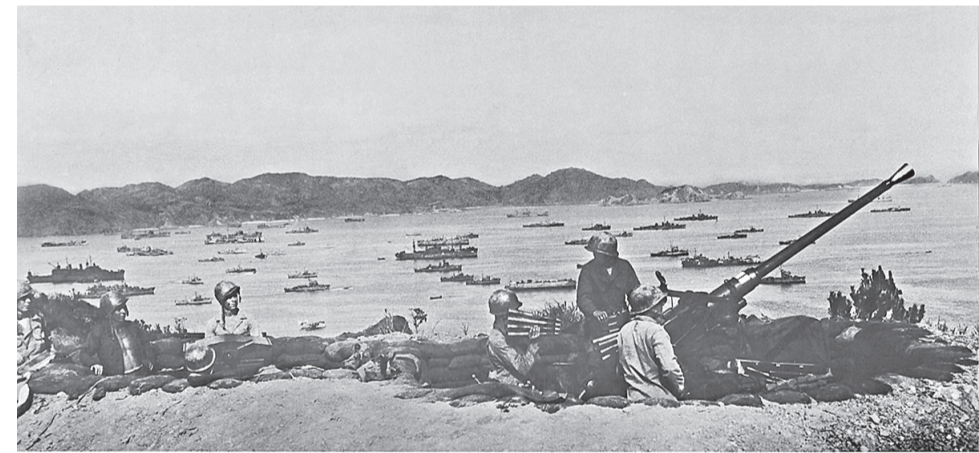
は娘を心配するどころか、「先に死ねて幸せだ」と言い残して、死に場所を求めて、私たちが家族を連れて壕から外へ出た。

自決させたのは教育や国の体制

米兵に捕まれば惨殺される、天皇のために死ぬのが大切だと教えられてきた、そんな時代だった。

体験の伝承が平和への一歩

母と私は捕虜になった後、すり込まれた教育をうらみ、母は壕へ行き、わが娘の遺骨を拾った。瀕死のわが子を見捨ててしまい、自分だけが生き延びて



沖縄本島上陸のため慶良間海峡に集結する米艦船群と、日本の特攻機の攻撃に備える米高射砲隊＝那覇出版社の「組写真 オキナワ」より転載

皆が浴びた自決の血しぶき

「残った者の戦後の苦しみ想像できますか」

小学校が接収されたために先に慶良間諸島を攻めた。たくさんある島の中から、日本軍がいた島だけが攻撃された。

艦砲射撃激化

覚悟して集合

3月23日から空襲や艦砲射撃が始まり、いしくなったため、私たちが

いざ戦争になると人間は動物以下になる。動物でもあんなことはない。集団自決は日本軍が直接命令したかどうかという問題

題なのは、島の人々を自決させてしまった教育や国の体制そのもの。そして、死にきれず生き残った者の戦後の生きた苦しみが想像して仲直りする時に「水に流して」という言葉を用いるが、戦争は水に流して消せはしない。私は島の人たちから聞き取りをし、平成元年から毎年1冊ずつ体験談を出版していき、わが娘の遺骨を